

# 気候環境の変動と祭祀とのかかわり

田上 善夫

Relation between Climate Environment Variation and Religious Service

Yoshio TAGAMI

E-mail: tagami@edu.u-toyama.ac.jp

## Abstract

In this study, the relation between climate environment variation and religious service was investigated. First, the shrines for the god who presides over climate were studied. Next, the present religious services concerned with climate were extracted, and their distribution maps over the whole country were drawn. Furthermore, the meaning of the religious service distribution for each climate element was analyzed. As a result, the followings were found: 1) The God concerned with climate, especially the one praying for rain, has been enshrined until the present around the mountain-foot areas of Nara and Kyoto. They are worshiped as rain god, water god or dragon god by the waterfalls and the mountain streams. 2) The traditional place for the rain gods is not the source of a river in that area. In addition, the places have changed with the times. The religious service, for a rain-praying god has its complex characteristics. They were also influenced by the central governor. 3) In religious service names, many characters concerned with climate are seen. They are for fine, rain, hot, cold, wind, water and so on. 4) Names of the religious services concerned with climate do not always show the climate phenomenon itself. In addition, it is not often the case that the god concerned with climate changes into a personified god. Except for the god of water, god of dragon, god of wind and god of thunder, the nature of the climate is indirectly indicated. 5) The number of religious services concerned with climate is different for each of the climate elements. Religious services for rain or river are few, but those for water are many. It is thought that deciding where to enshrine the god is easy in the case of water (god). 6) Distribution densities of religious services concerned with climate differ with areas. It is high in Kinki District, but low in Tokai and Nankai District. The distribution of religious services concerned with climate is not equal to the distribution of the climate phenomena itself. The former one is considered to have been influenced by the ancient religious services, such as praying for rain. 7) Among the religious services concerned with climate, the ones for water, fire or wind are especially common. The theory of Godai of the Mikkyo Buddhism, in which water, fire and wind are the three of the five elements of the universe, may have influenced it.

キーワード：気候環境，気候変動，祭祀，日本列島

keywords：Climate environment, Climate variation, Religious Service, Japanese Islands

## I はじめに

祭祀の中に、自然を対象とするものがある。農耕中心の社会では、五穀豊穡のために風雨の順調が祈願された。気候災害を受けることのないように、悪しき風荒き水にあわぬようとの祝詞が奏上される。また稲作をはじめとして、農耕に水は欠かせぬため、干ばつに際しては雨が祈願された。

こうした異常な天候による災害を受けないように、厄除祈願の祭祀が行われる。そうした祭祀は、雨乞にみられるように世界各地に存在し、かつ歴史時代を通して一貫して行われてきた。こうした祭祀の普

遍性により、その変遷の復元は祭祀と一定の関係を有する環境の変遷の解明にも資すると期待できる。

ただし雨乞いにしても極端な乾燥地域や、降水の過剰地域ではあまり行われず、また歴史時代を通じて盛衰がみられる。祭祀事体も本来多様であって、地域によりさまざまな様式がみられる。もとより遺された史料などにしても限られるが、それにもとづいて、環境の変遷を復元するには大きな支障となる。

そのためこうした気候災害を伴うような環境の変動と、それに対しての人々の祈願、祭祀との関係を把握する必要がある。本論では主要な気候災害と祭祀との関係について、時代による変容や地域による

差異の検討を試みる。まず歴史時代を通じて天候や気候災害に関わる祭祀の行われた地より、その祭祀の内容について明らかにする。次にそうした主要気候関連祭祀から、気候祭祀として可能性のあるものを、祭祀名称にもとづいて明らかにする。さらにそうした気候祭祀の、現在の全国分布から、気候祭祀のもつ意味について明らかにする。

## II 自然を祀る地

### 1. 自然の祭祀

#### 古代の気候の祭祀

奈良盆地の周辺では、古代から天候にかかわる多くの祭祀が記録に残されている。日本書紀では、天武天皇四(675)年に龍田に風の神を祀り、夏と秋の祭祀が行われるようになる。この龍田風神祭以前にも、天候の順調は農耕社会での一般的な祈願であったと考えられるが、常祭として記録に残されたため、気候環境の復元には重要となる。

奈良盆地でもその東部、南部には、雨や水にかかわる社が多い。続日本紀では、文武天皇二(698)年に芳野水分峰で祈雨が行われる。吉野水分神社は、吉野の標高600mの峰の上に鎮座している。水分の名が示すように、水の神である。主要な水分社として、都祁、宇多、吉野、葛城があり、それらは飛鳥の周辺に位置する。

宇太水分神社では、その名の示すように天水分神、国水分神を祀る。その社殿は国宝に指定されている(図1)。両神は、祀られるに際してその南東10kmに位置する高見山(1248m)に降臨したとされる。祭祀では、上流に位置して上社にあたる惣社水分社の女神が、<sup>ほうれん</sup>鳳輦で渡御する。また高見山麓には平野水分神社、下流に丹生川上神社中社がある。前述の都祁、宇多、吉野、葛城を含め主要な水神がみられるが、いずれも飛鳥地方の流域からは、分水界を越えた周辺にある。

宇太から北東に10km、室生川に沿う室生寺境内から1km上流に、室生龍穴神社が位置する。<sup>たかおかみのおかみ</sup>高籠神、善女竜王を祭神とする。社殿の上流から北側の山の溪谷に、吉祥龍穴がある。滑らかな岩肌の滝と岩窟が龍の穴とされ、祈雨の対象とされてきた(図2)。龍穴では平安以降に祈雨が繰り返されるが、この地は木津川の上流にあたっている。

#### 大和盆地周辺の雨神

天平宝字七(763)年を初めとして、祈雨、祈止雨の奉幣対象として繰り返し記録されるのが、丹生川上神社である。雨師として、祈雨の最も主要な対象であった。丹生川上神社は三社があり、約20kmの範囲内で、東から西に中社、上社、下社が鎮座する。この間には、吉野山がある。

丹生川上神社中社には、夢淵、吉野の東の滝があり、三方向の流れが合流する地である。式内社の丹生川上神社として、下社が比定された後、上社とされたこともあったが、中社であるとされている。ここでは、小川祭が行われている(図3)。

丹生川上神社上社は、<sup>たかおかみのおかみ</sup>高籠大神を祀る。旧社殿は、蛇行する流れの凸状に突き出す地にあった。4,000年前の縄文祭祀跡であり、奈良時代の集石遺構がある。旧社殿は湖水中に沈み、平成10(1998)年に、その上方にある現在地に遷座した。

丹生川上神社下社は、吉野川の下市口から南方、丹生川流域の長谷にある。白鳳四(676)年の創建とされるが、これは龍田社で風祭がはじめられた翌年にあたる。拝殿から上方の本殿まで階段が続く。<sup>くろおかみのかみ</sup>闇籠神を祀り、境内の前方に丹生川の河原がある(図4)。同神は谷の龍神といわれ、上社の高籠神は峰の龍神といわれる。

上社、下社の水源をたどると、山上ヶ岳(1719m)となる。その山頂からは、奈良盆地から大阪平野まで見渡される。山上ヶ岳山麓の<sup>どろがわ</sup>洞川は、和葉の陀羅尼助丸で知られる。その龍泉寺には瀧が祀られ、修験の行場とされる。

#### 京都盆地周辺の雨神

平安時代以降には、京都盆地の北の貴布禰神社が、祈雨の重要な対象とされた。丹生川上神社と並んで、丹貴と称された。岩倉から北に貴船川を遡った位置に鎮座する。貴船は溪流の地であり、現在も溪流上に設けられた、多数の川床料理の店で知られる。

貴布禰神社では高籠神を祀り、現在も3月9日に雨乞神事が行われる。かつて祈雨は三段の滝で行われていたが、現在は禁足地とされている。境内を流れる思い川の名の由来は、御物忌川といわれる。これは水を祀る広瀬神社の祭神、大忌神に通じる。貴布禰神社の奥宮は、貴船川の谷のさらに上流側にあり、そこには舟形石が祀られる(図5)。

平安京では貴布禰のような神社のみならず、宮中、寺院などさまざまな地で祈雨が行われてきた。それ





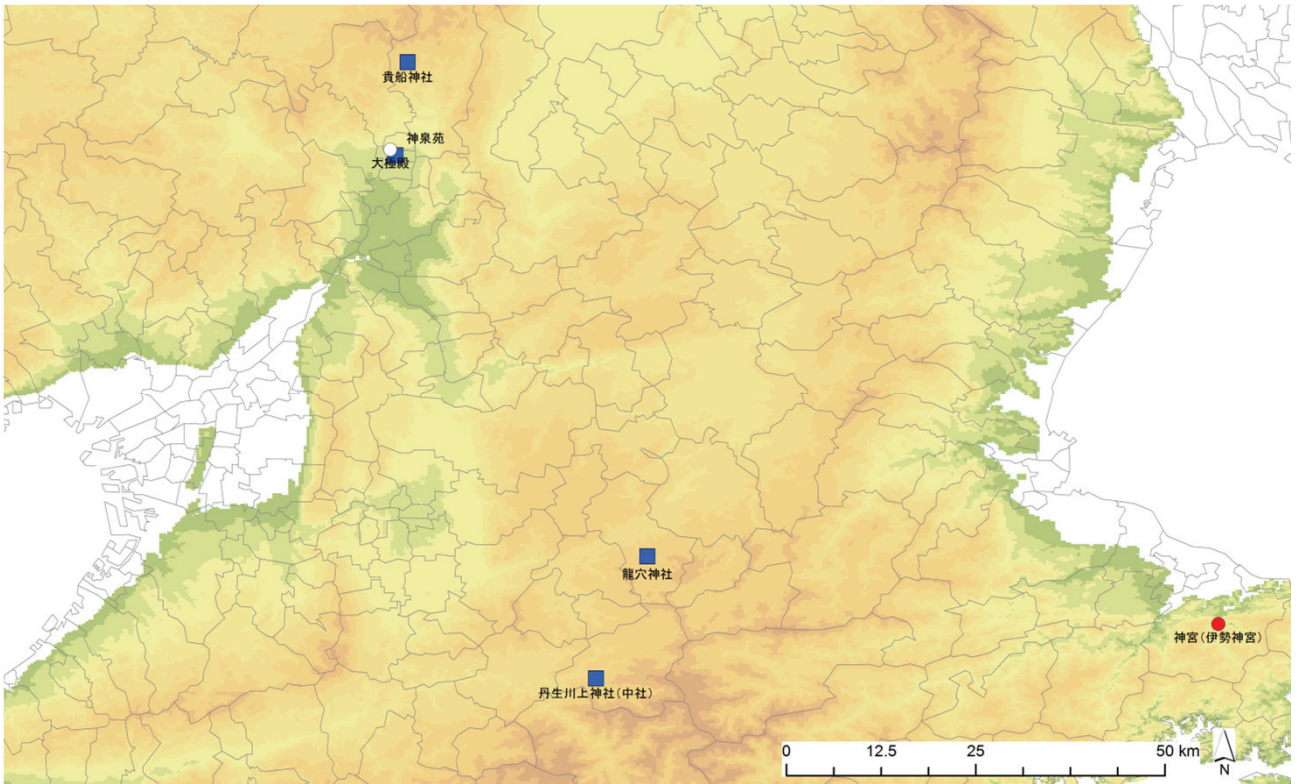


図8 平安年間の水神・雨神の地での祈雨

丹生川上神社と伊勢神宮は、すでに奈良時代から祈雨奉幣がなされていたが、平安京遷都以降には平安年間を通じ、本図の地に集中的に祈雨の記録が遺されている。水神・雨神としての神徳に特化され、祈雨祭祀において重要視されたとみられる。とくに丹生川上社は雨師神とされ、祈雨のときには黒馬、祈止雨のときには白馬が奉幣された。

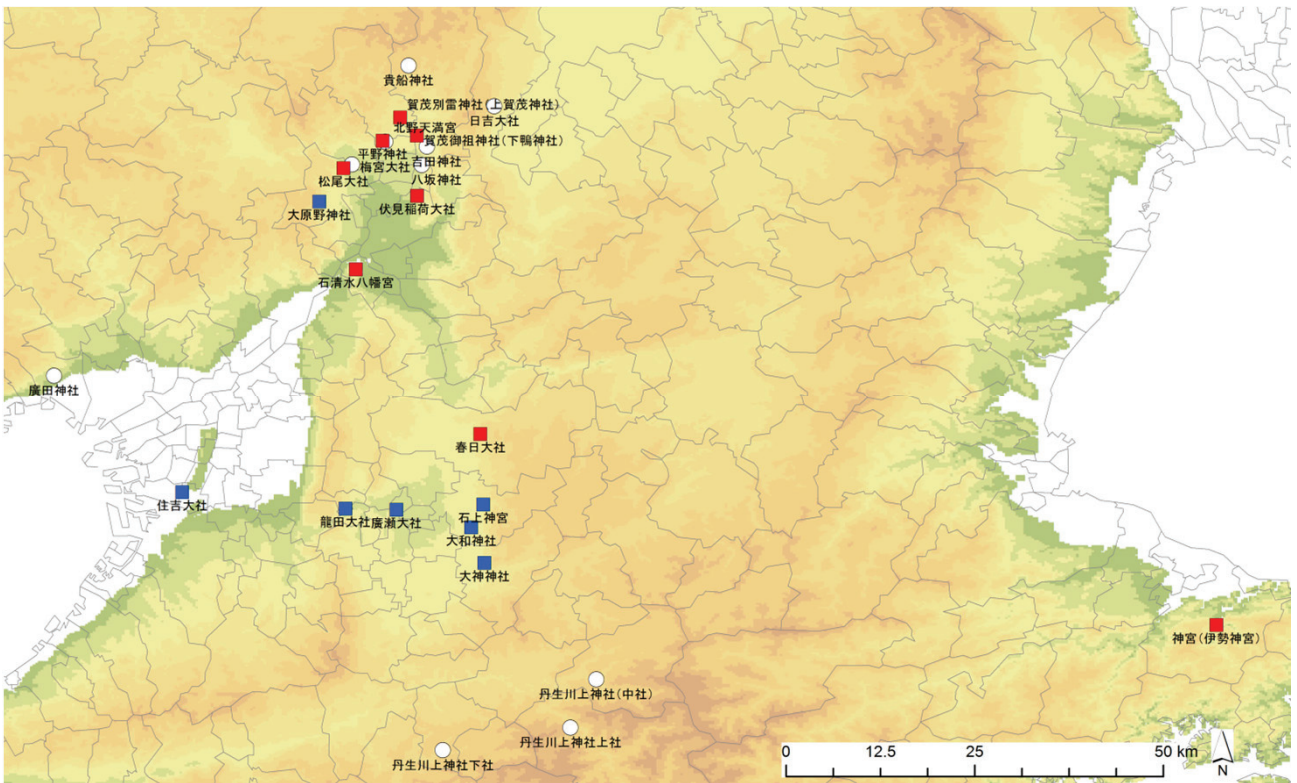


図9 平安後期の神道様式での祈雨の主要対象社

災害時には主要社への奉幣がなされていたが、平安後期の永保元(1081)年には、主要な二十二社が確立したとされる。平安前期には祈雨神八十五座(図7)のように、祈雨対象社はとくに大和盆地南部に集中していたが、後期になると分布の中心は京都盆地に移った。なお二十二社は、さらに以下に分けられている。■：上七社，■：中七社，○：下八社。

は神道、密教、修験、後には民間による多様な方法で行われる。その中で請雨経法や孔雀経法などの、盛大な祈雨修法が行われたのが神泉苑である。神泉苑は京都市内の二条城に隣接する地に現在も残る。境内は池を中心としており、そこに水神の善女竜王が祀られている(図6)。

神泉苑は、丹貴をはじめとした水神の祀られる瀧や溪流の地とは異なり、平坦な地にある。こうした水辺は祭祀の地として古来重要であるが、神泉苑では仏教由来の神を祀り、修法が行われ、現在も仏寺であり、仏教との結びつきが深い。

## 2. 祈雨の祭祀

### 祈雨神祭八十五座の位置

前節のように、水神をはじめ古来の著名な神々は現在も祀られている。こうした神々と同じ頃、あるいはそれ以前から、祈雨は国家的祭祀として、名山大川に対してなされてきた。さらに延長五(927)年の延喜式では、臨時祭の中の祈雨神祭として、八十五座の神があげられている。一社に複数神が祀られるところもあり、また近隣の神社もあるので、祀られる神社の数は50ほどである。

それらの神社位置は、これまでに比定されている(式内社研究会, 1977, 1979a, b, 1982a, b)。それにもとづき、祈雨神祭八十五座の位置を示す(図7)。なお比定の際に、複数の神社の可能性が残されたものについては、最も可能性が高いとみられる1ヶ所についてのみ記した。

この八十五座中には、折々の国家的な奉幣行事の行われた二十二社中の、十七社も含まれている。八十五座全体の分布範囲も、二十二社とほぼ同様の範囲である。そのため祈雨は、国家的祭祀の対象範囲と考えられる。祈雨は地方でも行われたが、祈雨神祭に八十五座があげられたことは、地方での祭祀を国として統制しないことを示している。

ただし二十二社が京都盆地に集中するのに対して、八十五座は大和盆地の南部一帯、とくに山麓付近に多く分布している。二十二社には、祈雨に限らず、多くの奉幣がなされる。それに対して、八十五社は雨に関する神徳がとくに重要であり、その分布地域は水神の地として認知されていたことが考えられる。神社名に山口社が多く、また飛鳥周辺の四つの水分社が含まれていることにも、水源の地が雨神や水神の坐する地として認識されていたことを示してい

る。延喜式の制定された10世紀初めにおいても、大和盆地に重心が位置することには、水神、自然神が平安以前より重要であったことがかかわる。また、古代より奈良盆地では「干ばつ」が多発し多くの溜池が築造され、一方、京都盆地では夏の蒸し暑さや大雨・洪水というかなり異なった気候特性を持っている(丸本美紀, 2013)。そのため時代的な影響以上に、京都盆地と大和盆地の水に関する気候環境の差異が影響していることが考えられる。

### 平安京と祈雨

9世紀から10世紀には、祈雨に際して習合的、密教的な様式が盛んに取り込まれるようになる。この頃に祈雨の地として、丹生川上神社、貴布禰神社をはじめとし、さらに京都の神泉苑、室生の龍穴が、とくに重視されるようになる(図8)。

水神である竜王、龍神の前での、請雨経法、孔雀経法の修法は、祈雨祭祀としてより効果的と考えられ、とくに10世紀を中心に盛行した。重視されたこれらの地は、八十五座と同様に水の地であるが、直接的な水源というわけではない。

延喜式以降に代表的な二十二社が定まるようになると、干ばつの際にはこの二十二社への奉幣が行われた。二十二社は京都盆地周辺に13社、大和盆地周辺に6社、大阪平野周辺に2社がある。なおこれらの主要社のほか別格として、伊勢神宮に奉幣される。二十二社には風雨順調のような天候を司る神として、貴船神社、龍田大社、廣瀬大社、丹生川上社が含まれる(図9)。

前述のように、個々の祈雨祭祀の行われる地は、瀧や池などの付近に位置しており、水の地である。ただし八十五座以降において重視された丹生川上社、神泉苑などは、流域が異なるか、あるいは重要な水源というわけではない。また祈雨には、両盆地からは東方に離れた伊勢神宮にも奉幣される。

そのため平安の雨神は、大和、山城の地域に限らず、より広域を対象としたことが考えられる。同時に古来の水神に、新たに経典と共に渡来したと言われる龍神が加わるようになると、水に対する観念、認知が変容したことが考えられる。雨師社である丹生川上社のある吉野の地は、主要な信仰対象である東の伊勢と西の高野の間に位置する。また水と深く結びつく南の熊野三山の入口にもあたり、水神の地と容易に理解されたことが考えられる。



### III 現在の気候祭祀

#### 1. 気候環境にかかわる祭祀

##### 祭祀の漢字と気候環境

祈雨や雨乞のような気候の祭祀は、干ばつのような気候災害とともに年代記中に収録される。気候の祭祀は気候災害に比べて、気候とのかかわりが間接的であるために、気候の祭祀による気候復元には多くの困難な点がある。そのため復元への利用は、祈雨などに限られている。ただし、こうした祭祀は歴史時代を通して一貫して行われてきたため、その利用の可能性は大きいと考えられる。

とくに農耕社会では農作物の生育に関して、天候の順調の祈願が普遍的に行われてきた。それら気候の祭祀と、実際の気候との関連について検討する。祭祀名に気候要素の名称そのものを含むもの、気候が神格化されて祭られたと考えられるもの、さらに順調な気候を招来するための神事とかかわるものなどを例としてあげる。

祭祀の資料には、「平成祭りデータ」(全国神社祭祀祭礼総合調査本庁委員会, 1995)を用いる。これより祭祀名に、上述の気候に関連する漢字を含むものを抽出する。なお祭祀には複数の名称、通称などをもつものも含めている。

祭祀名に用いられる漢字を集計すると、全てで2,153種ある。出現の多いものから上位20位までの漢字と、その出現度数を示す(表1)。出現の多いのは、例、大、秋、祭の順であるが、これは祭祀の名として、「秋季例大祭」などが一般的であることを示している。また祈年祭、新嘗祭などの祭祀が一般的に行

表1 頻出漢字

漢字	出現数
例	96,868
大	60,569
秋	47,825
祭	42,525
春	40,418
神	38,886
季	38,623
祈	34,627
年	29,036
新	28,888
夏	21,749
旦	19,141
嘗	18,198
社	17,004
歳	14,574
月	13,965
元	12,215
御	10,507
被	9,803
宮	9,519

われることを示している。祭祀名に冠される季節は、秋、春、夏の順である。なお冬は1,055回であり、秋、春、夏に比べて一桁少ない。正月には多くの祭祀が行われるが、正月は新春のために、祭祀名に冬が現れにくいことが考えられる。

各漢字のうち、出現数が10回以上であるものは、1,075種類である。その中から漢字のもつ意味として、気候環境と関わる可能性のあるものがあるものとして、45の漢字を抽出した。さらにそれらを晴天や乾燥など、気候環境の種類に分け、その出現数と共に示す(表2)。

それぞれの出現数は気候要素により、また地方により、大きな差異がある。また、気候現象そのものの名称よりも、神格化されるなどにより、抽象的名称となることが多い。風では現象としての風そのものから、神の意思の伝達として捉えたりされるが、そのため分析に際しては、関連する別称を含めることが必要となる。

##### 気候環境を示さない名称

一方、固有名詞にこれらの漢字が使われるなど、気候環境とは関わらない場合がある。そのため、これらの漢字を含む祭名を検討する。

晴天に関して、晴、光、温、陽、煖がある。光は森光、日光のような地名としても現れ、また観光祭、のようにも現れる。温は気候的な暖かさよりも、温泉祭として現れる。陽は、紫陽花祭や重陽祭として現れる。煖は、七煖女稚児行列安全祈願祭として現れ、気候環境とは結びつかない。

曇天に関して、雲、蔭、霞、陰がある。雲は大半が出雲大社、八雲神社に関する祭りであり、雲祭はない。蔭はほとんどが御蔭祭に類するものである。霞は霞祭が3例、雲霞祭が9例あるが、気候環境と結びつくものか不明である。陰は大半が陰陽として現れる。

寒冷に関して、霜、涼、寒、雹、氷、雪がある。霜は、出現は非常に多いが、ほとんどが霜月祭に関するもので、わずかに霜除祭などが6例現れる。

表2 気候環境に関する漢字の出現数

晴天		曇天		寒冷		風波		水源		水流		採水		水神		降水		乾燥	
晴	460	雲	227	霜	618	風	2,460	井	217	水	1,454	潮	151	龍	2,442	雷	165	火	4,289
光	81	蔭	48	涼	142	嵐	72	泉	91	川	473	汐	83	竜	127	降	101	焚	2,952
温	78	霞	13	寒	49	波	52	池	89	流	391	塩	56	滝	51	雨	67	干	94
陽	63	陰	11	雹	32	鎌	15	湖	13	河	67			瀧	28	傘	24	熱	27
煖	11			氷	29	吹	12			沢	28			瀧				乾	11
				雪	11														

風波に関して、風、嵐、波、鎌、吹がある。波は地名、また「は」の当て字として用いられ、自然現象としての波とは結びつかない。鎌は鎌倉として使われており、鎌打ちなどは半数ほどである。吹は吹子祭のように使われることが多い。

水源に関して、井、泉、池、湖がある。泉はわずかに泉祭、霊泉祭があるのを除くと、ほとんどが温泉にかかわる。湖も湖祭や湖水祭があるが、水とのかかわりは不明である。

水流に関して、水、川、流、河、沢がある。流れは大祓形代流祭、流鏝馬神事などとして現れ、水流に結びつかない。沢は地名として現れ、沢のお祭りというものが1例あるほか、祭祀の対象ではないようである。

降水に関して、雷、降、雨、傘がある。降は降臨、降誕のように現れ、また浜降祭が多いが禊につながると考えられる。傘は多くが花笠神事のように現れる。

乾燥に関して、火、焚、干、熱、乾がある。焚は火焚祭のように火と組み合わせで現れ、またそうでない場合には、祈禱木焚上神事のように、気候環境を必ずしも示さない。干の多くは虫干祭である。熱の大半は熱田神宮にかかわり地名を示しており、熱送りのように気候環境を示す可能性のあるものは9例にすぎない。乾は虫乾のように干の意味で用いられている。

## 2. 気候祭祀の名称

### 祭祀名と気候環境

前節での祭祀名の検討から、気候環境と関連の薄

い22の漢字を除いて検討する。それらは、晴天に関する晴、寒冷に関する涼、寒、雹、氷、雪、風波に関する風、嵐、水源に関する井、池、水流に関する水、川、河、採水に関する潮、汐、塩、水神に関する龍、竜、滝、瀧、降水に関する雷、雨、乾燥に関する火、の23字を対象とする。ただしその中で、川と河、潮と汐と塩、龍と竜、滝と瀧には大きな区別はないようである。また、「お」と「御」など同じ内容のものは、まとめてあつかう。

### 天候に関する祭祀

晴天に関して、晴は祈晴祭として現れる(表3)。わずかに厄はらしなどに晴の字があてられることがある。晴は基本的に晴天の祈願にかかわっており、天候の順調の祈願、あるいは祈止雨として長雨などに結びつくことが考えられる。

寒冷に関して、涼は納涼、御涼として現れる(表4)。これらは暑夏に結びつくため、涼は他と季節的に異なる。寒は、寒冷というより、二十四節気の寒の期間の祭祀であることを示している。雹、氷、雪が祭祀名として現れることは少ないが、大気現象そのものを表す用語であるので、重要である。ただし、雹祭りのように雹が祀られるとともに、雹除けのように雹を忌避する祭祀も行われている。雹は災害であるため、雹祭りでは雹を鎮めることが祈願される可能性がある。

風波に関して、嵐は除けることの祈願が、明瞭に現れている(表5)。風の祭祀はきわめて多数にのぼるが、風の祭祀の名称、祭神、期日などに関して、先に検討した(田上善夫, 2000, 2012)。そのためここでは省略するが、風の祭祀では自然現象とし

表3 晴天の祭祀の名称別数

祈晴		厄晴	
祈晴祭	440	厄晴祭	8
晴雨孝神事	3	願晴祭	3
祈晴雨祭	1	その他	5

表4 寒冷の祭祀の名称別数

涼	寒	雹	氷	雪
納涼祭 86	御寒祭 21	雹祭 12	氷祭 8	雪祭 2
御涼祭 51	寒入祭 8	雹祈禱 13	氷祈禱 2	吹雪祭 1
その他 5	寒中祭 1	雹除祈禱 2	氷嵐除祭 1	赤雪祭 1
	寒明祭 1	雹除祭 2	氷の日 1	雪中花水祝 1
	寒山祭 5	雹止祭 1	氷雨祭 1	雪洞祭 1
	その他 13	雹嵐除 1	氷朔日 1	雪灯籠祭 1
		その他 1	氷室祭 4	御雪移祭 1
			その他 12	その他 3

表5 嵐の名称別数

嵐	
嵐除祭	65
避嵐祭	1
氷嵐除祭	1
雷嵐除祭	1
雹嵐除祭	1
嵐籠	2
その他	1

表6 水源の祭祀の名称別数

井		池	
御潮井	47	御池祭	17
御井戸	26	池宮祭	7
岩井戸祭	21	池神祭	4
井神祭	10	池替祭	9
その他	113	その他	53

ての風のみならず、天候の総称としての風、さらに神性の表現としての風が現れてくる。

### 水に関する祭祀

水源の祭祀では、井では井神祭が少数であるが現れる(表6)。井戸は島嶼部などでは祭祀の重要な対象であるが、農業用というより生活用の水源のため、神社での共同祭祀に現れないことが考えられる。池では池替が祭祀とされるが、祈雨に結びつく可能性がある。池が祭祀名に現れることは多くないが、先述のように龍神と池は多くが仏寺に結びつくことによると考えられる。なお御潮井は、採水の祭祀に出てくるように、井戸というよりも海を現している。水流の祭祀では、水では水、水神、水神社、水口、その他に分けてみることが出来る(表7)。水の祭祀で最も多数を占めるのは、水神祭である。水を祭るのに、単に水祭とされることは少ない。また水神を祭る、水神社などの祭とすることも多い。このことは、風神に多様な意味が込められているのと同様に、水神にも自然現象としての水のみならず、多くの意味が含まれていることが考えられる。また、農耕に重要な用水も、祭祀名に具体的に用いられることはない。お水取りや若水祭りは、水神祭にくらべると

少ない。

また川／河では、祭祀名は比較的単純である(表8)。川の祭祀は、主として川祭りとして行われている。いうまでもなく、河川は農耕で、また災害としても重要な祭祀の対象となる。それにも関わらず川の祭祀が少ないことは、具体的な川に対してではなく、先述のような水などに対して神格、神性を認めたことが考えられる。

採水の祭祀では、潮、汐、塩の字で類似する一方、意味には多少の差異がみられる(表9)。御潮井、御汐井、また千度潮井、千度汐井が非常に多く、また潮と汐を汲む、搔く、取る、採る、のように表される。これらは浜辺を井戸とみなして、そこから水をいただくことを表わしているものと考えられる。また塩の場合には塩垢離が多いが、垢離を取るや垢離を搔くは水行であるように、塩も潮や汐と類似の意味を示すと考えられる。

### 祈雨に関する祭祀

水に関する祭祀でも、とくに祈雨の際には、瀧や龍、雨乞いや火焚きが行われてきたため、それらについてまとめる。

水神の祭祀では、瀧／滝の祭祀の名称は、瀧祭お

表7 水の祭祀の名称別数

水		水神		水神社		水口		他	
天水祭	71	水神祭	321	水天宮祭	44	水口祭	17	水無月祓	349
水祭	28	大祓祭・水神祭	161	水神社祭	43	水分社祭	17	水月祓	18
水まつり	2	水神祭	36	水神宮祭	37	用水の湯祓	11	水月大祓	3
		水神様	15	初水天宮祭	3	用水祭	10	若水祭	25
		水神講	12					お水取り・貰い	9
		皆作(水神祭)	7					水取祭	3
		月次水神祭	3					水もらい	2
		八大龍王水神祭	3					水神幣切	3
		水神荒神祭	2						
		川原水神祭	2						

表8 川/河の祭祀の名称別数

川		川		他	
川祭	98	川行(足洗い)	3	春祭・荒川稲荷社初午祭	47
川まつり	7	川渡祭	3	天川社祭	30
川下祭	7	河濯祭	5	川西彰魂社例祭	11
川原祭	7	川濯祭	3	氷川祭	8
川瀬祭	7			河内社祭	6
川すそ祭	5			河内神社祭	5
川口祭	4			川越祭	5
川除祭	4			井川神楽	4
川裾祭	4			井堤川祭	3
河祭	3			川尾社春祭	3
				豊川稲荷祭り	3

表9 採水の祭祀の名称別数

潮		汐		塩	
御潮井	32	御汐井	13	塩垢離	9
千度潮井	28	千度汐井	7	塩汲祭	4
潮汲	31	汐搔	26	塩祭	1
潮祭	13	汐汲祭	15	塩湯	5
潮搔	12	汐取祭	9	その他	37
潮干祭	6	汐祭	3		
潮止祭	4	その他	5		
その他	25				



表10 瀧/滝の祭祀の名称別数

瀧	瀧宮	龍田社
瀧祭	8	瀧宮祭 3
お滝祭	5	龍田恵美須大祭 1050
御滝神事	5	龍田社祭 5
滝祭	5	
大滝祭	2	
滝さん	2	

よび瀧宮祭がそのほとんどを占める。滝の水の落ちる様態から、滝は竜とみなされて龍神が祀られ、祭祀の対象として瀧と龍とは同一視されることがある。ただし祭祀名の種類が限られていることは、自然としての滝ではなく、想像上の存在であり神性を表わしやすい龍に置き換えて祭ることが多いことが考えられる(表10)。実際に、龍/竜の字を含む祭祀は、きわめて多数にのぼる。ただし、龍田恵比寿大祭、龍頭の舞神事の名称で大半が占められている(表11)。

表12 雪の祭祀の名称別数

雷神	雷神社	雷除
雷神祭	40	雷電神社祭 11
雷電祭	12	雷神社祭 10
雷祭	6	雷除祭 13
		八雷神社祭 7
		鳴雷神社祭 4
		大雷神社祭 3
		別雷神社祭 2
		雷電宮祭 2

表11 龍/竜の祭祀の名称別数

龍頭	龍王	龍王社
龍頭の舞神事	739	龍宮祭 27
		龍神祭 33
		竜宮祭 15
		竜神祭 13
		龍神社祭 13
		竜王護国社祭 6
		竜王神社祭 5
		龍神さん 7
		竜王講 5
		龍神宮祭 5
		八大龍王祭 5
		山神社龍王社祭 2
		竜神さん 5
		善知鳥龍神宮例祭 2
		竜王社祭 2
		竜社例祭 2
		竜神社祭 2

これらの場合には、気候環境との関係を考えにくい。そのほかは龍王、龍神、また祀られる龍宮、龍神社が祭祀名に用いられるが、種類は限られる。これは先述のように仏教との関係が考えられる。

降水の祭祀では、雷の祭祀は、雷神または雷電祭、あるいは雷神社祭または雷電社祭り、として行われている。雷は災害というよりも、暑夏に雷鳴とともにもたらされる夕立は、貴重な水源であった。雷というより水が主であるためか、祭祀名のバリエーションは限られている(表12)。また雨では雨祝、雨乞、雨宮に関するものが主である(表13)。総数は少ないが、雨という気候現象として最も重要なものの一つであり、その祭祀について検討する。その名称には基本があり、最多のものは雨乞にかかわるものである。続いて雨について感謝する祭り、雨神を祭る雨宮の祭りがほぼ同数ある。雨宮は境内社として祭られることも多い。そのほかには、風や晴れや滝

表13 雨の祭祀の名称別数

雨祝	雨乞	雨宮	その他
雨喜び祭	2	雨乞祭	15
雨の祝祭	1	雨乞祭	15
雨よろこび	1	祈雨祭	5
雨之祝	1	雨乞い神事	2
祈雨感謝祭	1	雨乞祭り	2
慈雨感謝祭	1	雨乞神事	2
風雨順和祭	1	雨祈い祭	2
風雨和順祭	1	雨給れ	1
		雨乞いザサラ	1
		雨乞い記念祭	1
		雨乞い祭り	1
		雨乞山祭	1
		雨請天満宮祭	1
		祈晴雨祭	1
		郷土芸能雨乞太鼓踊	1
		古来飽田託麻の雨乞祈禱所	1
		十七夜雨乞祭り	1
		雨宮祭	2
		雨之社祭	2
		雨宮神社祭	1
		雨宮風宮祭	1
		雨之宮社例祭	1
		末社雨宮八幡社例祭	1
		穀雨祭	1
		祭礼・雨灯笼	1
		水雨祭	1
		晴雨孝神事	3
		普利雨祭	3
		梅雨分けの祭	2
		雨瀧祭	1
		雨風神社例祭	1

表14 火の祭祀の名称別数

鎮火	火	火焚	火伏	他
鎮火祭 1461	火祭 631	新嘗火焚祭 418	火伏せ 115	左義長火祭り 25
鎮火の行事 29	火まつり 59	節分火焚祭 258	秋葉講防火祈願祭 103	火渡 17
祈年祭・鎮火祭 25	火燈祭 20	お火焚・祭 162	火防祭 84	火の神祭 16
大祓・鎮火祭 19	御神火祭 17	火焚き神事 77	火災除祭 14	火鑽神事 10
火鎮祭 19	火ともし祭 5	御火焚祭 54	防火安全祈願祭 12	忌火祭 9
鎮火神事 9	神火祭 5	火焚祭 34	防火祭 11	火清鳴弦行事 9
田祭・鎮火祭 8	御神火燈明行事 4	厄除火焚神事 15	秋葉の火祭り 10	焼火祭 9
山王御祓・鎮火祭 5	五穀豊穰・火祭 4	火焚神事 13	防火祈願祭 9	風早の火事祭 8
鎮火大祭 3		火焚き式 12	秋葉社火祭 9	花火祭 8
		火焚串焼上祭 9	火除祭 8	火爐祭 7
		火焚通夜 6	無火災祈願祭 6	火振祭 7
		火焚き 5	火災記念日祭 5	煙火奉納 7
		秋季火焚祭 5	愛宕火祭 5	火烧神事 6
		火たき祭 4	火ぶせ祭り 4	燈火祭 5
		稲荷社火焚祭 3	火除神社祭 3	花火奉納神事 5
		焚火神事 3		別火講中 5

などとの複合的な祭りがある。さらに氷雨、梅雨分けなどを祭るが、その意味は不明である。普利雨は降雨、あるいは風流につながるかもしれない。

乾燥の祭祀では、火の祭祀名は多岐にわたる(表14)。火の祭祀で、突出して多いのは鎮火祭、また火祭りである。また火伏あるいは防火の祭祀のように、火災に対しての祭祀も多数含まれている。火も水と同様に重要、かつ災厄をもたらすが、それぞれの祭祀にはこの相反する内容を含むことも考えられる。また干ばつに際して、臨時に大がかりな祈雨の祭祀が行われた。雨乞いの際には、火が重要な役割を担い、火により天との疎通がはかられた。とくにお火焚という祭祀名が多いが、これは雨乞いにもつながる。

### 3. 気候祭祀の分布

前節での祭祀名と気候環境とのかかわりの検討にもとづき、主要な漢字を含む祭祀について、その行われている神社の分布を示す(図10, 11)。一般に北海道、また沖縄での祭祀の数は少ない。一方中部と近畿では多いが、その分布には地域的な傾向がみとめられる。

#### 天候に関する祭祀

雪はときに大きな災害をもたらすが、その祭祀の数は限られている。必ずしも北日本の祭祀というわけではなく、とくに豪雪地帯での祭祀ではない。雪の祭祀の名称と分布には一貫した傾向はなく、それぞれが個別的な祭祀となっている。また、災害除け

というより、降雪を祈願する傾向がみられる。農耕、とくに稲作に関して、雪は障害とならないことが関係すると考えられる。

風の祭りは、気候の祭祀として代表的なものであり、その分布は全国的である。風祭として、風雨の順調が祈願される場合が多いが、とくに近畿、中部、関東、および北九州に集中している。太平洋岸は台風の上陸に際し、大きな被害を受けるが、そこではむしろ風の祭祀は少ない

#### 水に関する祭祀

水と直接的、間接的にかかわる祭祀として、水、川、潮などがある。水の祭祀は、類似する雨に比べて圧倒的に多いが、水に関する祭祀が、水だけに総称されることが考えられる。水の祭祀は全国的に分布がみられるが、関東から西に多く、東北日本には、比較的少ない。水の祭りは南方で活発であることは世界的にもみられる。西南日本では、とくに近畿、北部九州に多い。これは風の場合と同様である。水は干ばつのみならず、洪水災害をもたらすが、大河川とは必ずしもかわらない。

川の祭祀は全国的にみられるが、その数は必ずしも多くはない。これには先述のように、水の祭りに集約されたことが考えられる。川の祭祀は、とくに中部日本から西日本に多い。とくに、東海、北陸、畿内、九州北部に多くみられる。また、水に対して局地的な分布がみられる。上述の水、水神が水源の意味を含むのに対し、川は氾濫するものとしても、認知されることが考えられる。

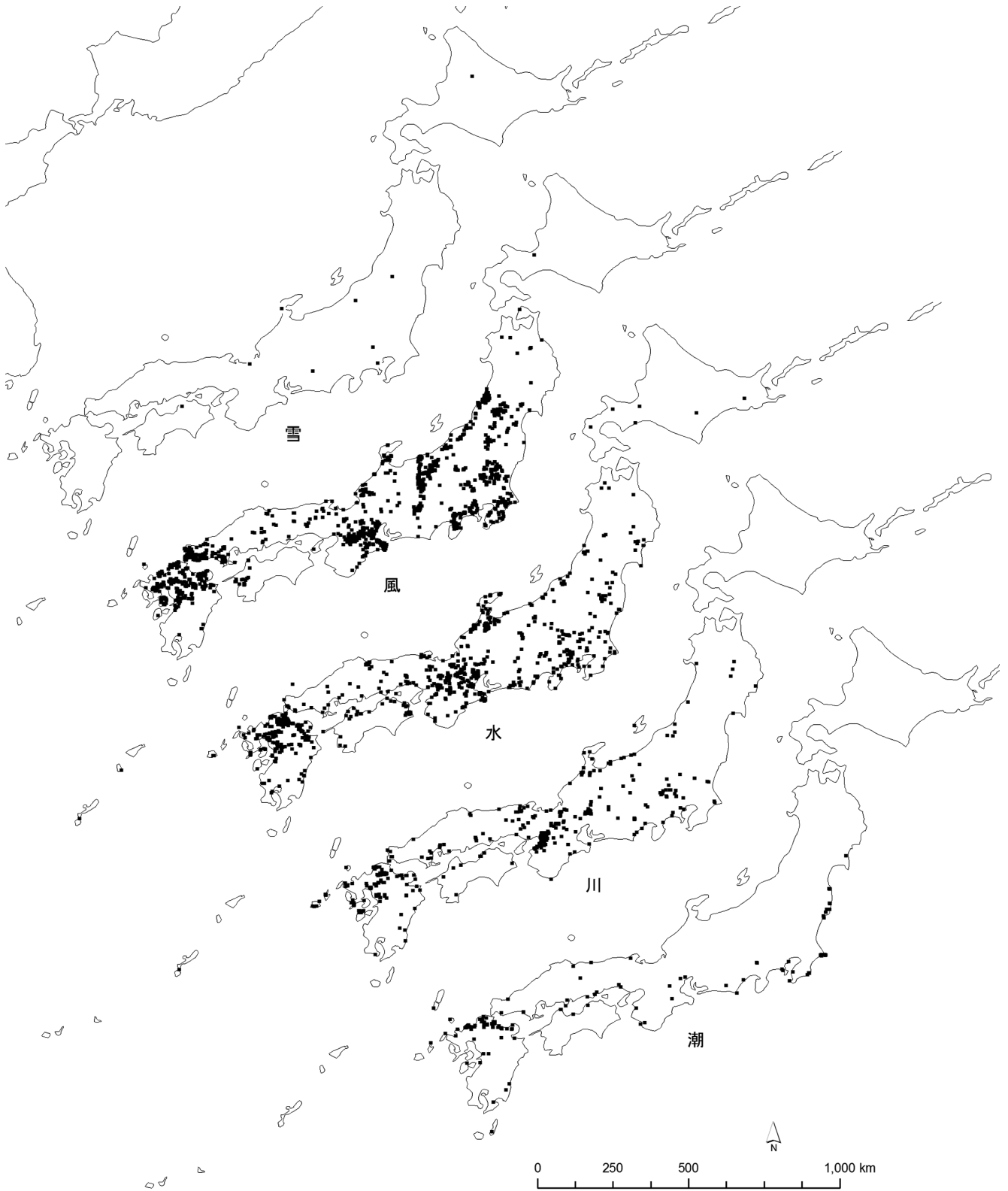


図10 天候に関する祭祀（雪・風）と水に関する祭祀（水，川，潮）の分布  
祭祀の行われる神社の位置と祭祀の名称を示す。



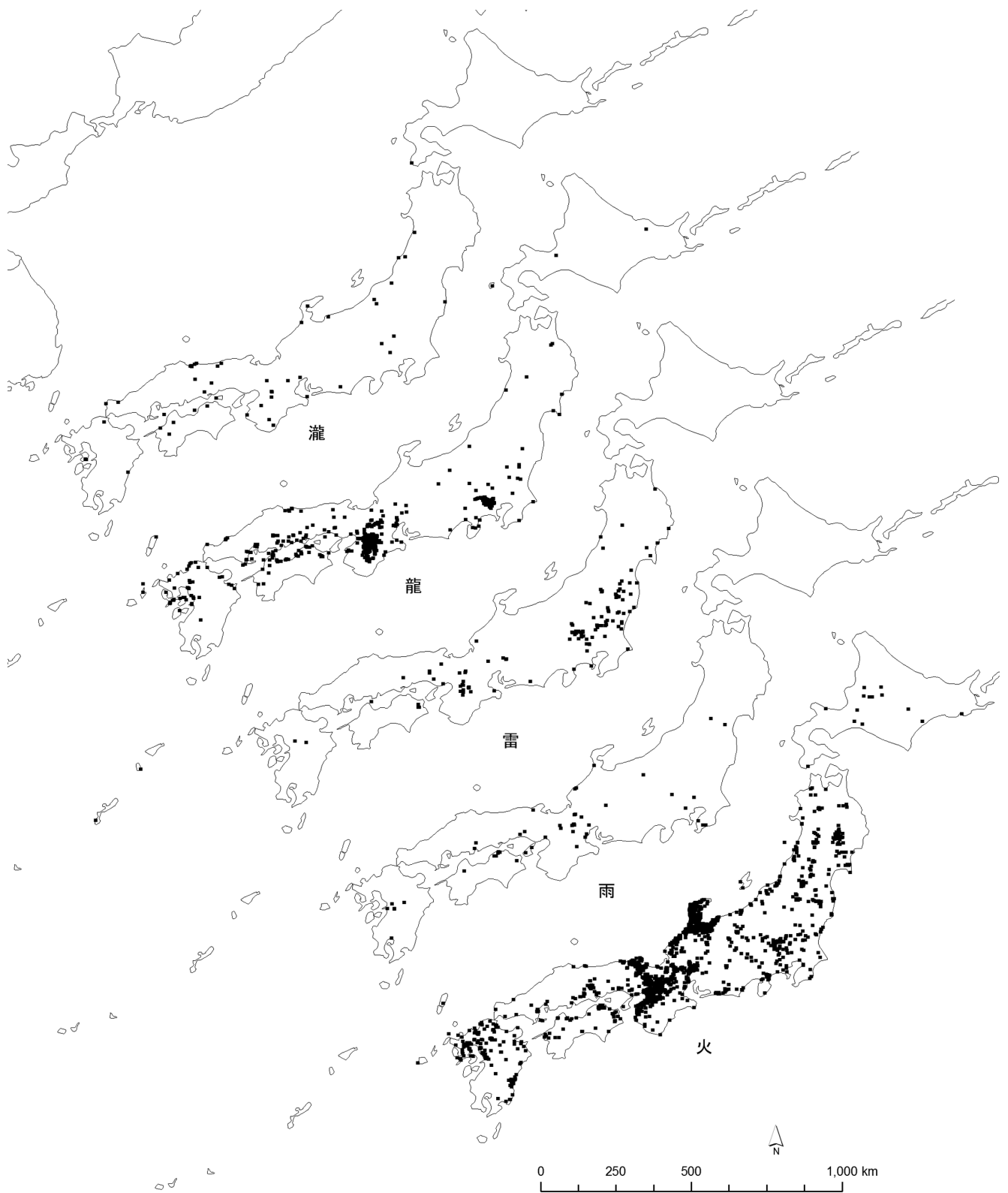


図11 祈雨に関する祭祀（瀧、龍、雷、雨、火）の分布

火は気候災害ではないが、祈雨などの祭祀につながる

潮は先述のように、水、採水にかかわる祭祀である。潮、塩、汐の祭祀の分布は、東北南部から以西の太平洋岸であり、日本海側にはきわめて少ない。また北九州に集中してみられる。お潮井などの祭りでは、海岸で海水が汲まれるが、ここで海水に象徴されるのは水であり、農耕用の水を得ることを示している。北日本、日本海側に少ないことは、水に比較的恵まれたことによると考えられる。

#### 祈雨に関する祭祀

滝は、祈雨の行われる場として重要であるが、滝は水源を示すと考えられる。滝の祭祀の分布は偏在しており、近畿から中国・四国地方にみられる。一方、滝の多い中部山岳周辺での祭祀は限られる。

龍の祭祀は、関東と近畿に多いが、その他には瀬戸内と九州北部に多い。一方、北日本や日本海側では少ない。龍王、また龍神の祭祀が多く、分布は祈雨と深く関わると考えられる。ここでとくに東京と奈良で突出しているが、東京で多いのは龍頭の舞神事であり、奈良で多いのは龍田恵比寿大祭である。これらの祭祀に集中するために、祈雨とは必ずしも結びつかない。

雷の祭祀は雷雨、夕立を通じて、雨がもたらされることにつながると考えられる。雷の祭祀の分布は偏在しており、南東北から関東でもっとも多い。畿内にもみられるが、それ以西ではきわめて限られ、日本海側でも少ない。このことは、雷の発生のみならず、雷災とのつながりも含まれると考えられる。

雨の祭祀は、先述のように数は少ない。分布が限定されることは、稲作に関して水神の優先が影響すると考えられる。雨は天から降るため、雨神を祀る位置の特定は困難であるが、水源は明瞭であるので、水神がその地に即して祀られたことが考えられる。雨の祭祀の分布はやや偏り、関東、瀬戸内、とくに近畿に分布する。祈雨神事が、朝廷により近畿地方で行われたことがかかわると考えられる。

火の祭祀は多い。ここで火について、火が人為により生じたとしても、発火後に自然に持続することから、人格化されることなく火の神として捉えられていると考えられる。その祭祀は多数にのぼり、全国くまなく分布する。ただし局地内への集中が著しい。とくに北陸および畿内である。北陸に集中することには、冬の気候環境の影響が考えられる。

## IV 気候災害と気候祭祀

### まつりと気候祭祀

祭祀は世界各地の文化のもとでも行われるが、神尊を祀り、祖霊を祭って、生命や作物が豊かであること、年の多幸や天下の太平を祈願し、感謝する。ここで対象とした祭祀もその中に位置づけられるが、資料は神社祭祀に属するものである。寺院でのように宗祖や祖先の霊を祭るというより、神を招いて饗応し、祈願するという面が強いため、気候祭祀とのかかわりが強いことが考えられる。また神社で行われる祭祀のため、共同体の儀礼であり、またイベントとして独り立ちした奉納行事ではなく、神事にもとづいていることも、気候祭祀とのかかわりが強いと考えられる。

ただし、使用した資料中の祭祀には、全国でさまざまな様式がみられ、祭神は氏神や鎮守、学芸や武芸神、商売神など多様であり、祈願や報恩などの内容を含み、習合や合祀などを経て歴史的にも変容を重ねている。そこから抽出された気候祭祀も、それらとの習合があるため、抽出された、気候祭祀にも複合的な内容が含まれている。

### 気候祭祀分布の粗密

類似すると考えられる気候祭祀でも、その数は大きく異なることがある。中でも雨の祭祀は水の祭祀にくらべ、その数は著しく少ない。これは、雨が臨時祭、水が常祭としておこなわれたことによると考えられる。10世紀前後より、祈雨でも仏教儀礼が盛んとなった。このことも、神社での雨の祭祀を少なくさせていると考えられる。神社での雨の祭祀が近畿と瀬戸内東部に多いことは、古代の朝廷による祈雨祭祀の対象範囲にかかわる。

先述のようにこれら気候祭祀の分布には偏在する場合があるが、一方で東海、南海、山陰地方は、総じて気候祭祀の分布が稀薄となる傾向がみられる。また海岸付近では比較的祭祀が少ない傾向もみられる。こうした地域では、雨風などの気候環境が異なるという以上に、気候ないしは自然への認知が異なることが考えられる。

### 気候祭祀の内容

先述の気候祭祀では、雨や雪は少ない一方で、とくに風、火、水、などへの集中がみられる。多くの気候の要素がある中でも、少数のものにとくに強い神性を認めることが考えられる。

ここで五輪塔には、地、水、火、風、空、が表されるが、この五大は平安の密教の影響といわれる。インド系の五大に類似して、中国系の陰陽五行では、木、火、土、金、水の五行を基本とし、それに対応する、風、熱・暑、湿、燥・寒、寒・燥を五悪とする。

五大では、水、火、風が含まれ、五行では、風、熱、湿が含まれるが、気候祭祀に風、火、水が多いことには、インド、中国と共通あるいは影響の存在することが考えられる。

## V おわりに

各地に伝わる祭祀には、さまざまな意味が含まれているが、神への感謝や畏敬の念を表わし、不安や害悪を除いて平安や豊饒がもたらされるよう祈願される。農耕社会ではとくに、自然への感謝や災害除けの祈願は重要となる。そのため祭祀の記録には、多くの自然に関する情報、さらに気候環境の変動に関する情報が含まれている。

本論では気候環境の変動と祭祀のかかわりについて、調査・分析を行った。まず天候や気候にかかわる神を祀り、その祭祀の伝えてきた神社について、調査した。次に現在も行われている気候にかかわる祭祀を抽出し、その全国的な分布を調査した。さらに気候の要素ごとに祭祀の分布を明らかにし、その分布の傾向のもつ意味について分析した。その結果、およそ以下のことが明らかになった。

- 1) 気候にかかわる神で主要な祈雨神は、現在も奈良や京都周辺の山麓などに祀られている。いずれも滝や溪流の地であり、雨神、水神、また龍神として祀られている。
- 2) 古代より伝わる祈雨神の地は、地域的な水源の地ではない。また時代によりその位置も変化している。祈雨神祭には複合的な性格があり、国家の影響も受けている。
- 3) 現在行われている祭祀にも、気候にかかわる文字が含まれるものが多数ある。晴雨や寒暖に関するものがあり、さらに風や水に関するものはとくに多い。
- 4) 祭祀の名称は、気候現象そのものではない。また人格神化される場合は限られる。水神、龍神、風神、雷神を除くと、抽象的・間接的に気候の神性が示されている。

- 5) 気候祭祀は、要素により多少がある。雨や川は少ないのに対し、水は多い。前者に比べ後者は、神の鎮座地を直接的に比定することが容易なためと考えられる。
- 6) 気候祭祀の分布には粗密があり、およそ関東や近畿に多く、東海や南海に少ない。気候現象の分布そのものでなく、古代の祈雨祭祀などの影響と考えられる。
- 7) 気候祭祀の中でも、とくに水、火、風の祭祀が多い。これには陰陽の五行の影響や、とくに水、火、風を含む、密教の五大の影響が考えられる。

## 文献

- 式内社研究会(1977):『式内社調査報告5 京・畿内5』皇学館大学出版部, 539p.
- 式内社研究会(1979a):『式内社調査報告1 京・畿内1』皇学館大学出版部, 433p.
- 式内社研究会(1979b):『式内社調査報告4 京・畿内4』皇学館大学出版部, 419p.
- 式内社研究会(1982a):『式内社調査報告2 京・畿内2』皇学館大学出版部, 547p.
- 式内社研究会(1982b):『式内社調査報告3 京・畿内3』皇学館大学出版部, (549-)1040p.
- 全国神社祭祀祭礼総合調査本庁委員会(1995):平成祭データ(CD-ROM).
- 田上善夫(2000):富山県周辺における風祭と風鎌について. 富山大学教育学部研究論集, 3, 69-82.
- 田上善夫(2012):風の祭祀の展開と景観. 富山大学人間発達科学部紀要, 6(2), 91-105.
- 丸本美紀(2013):奈良盆地と京都盆地における瀬戸内気候としての乾湿の違い. 日本地理学会発表要旨集, 84, p.124.

(2013年10月21日受付)

(2013年12月11日受理)